

守能断腸花

漱石先生と運座

漱石先生と運座（抄）

『倫敦塔』を読んでからの漱石先生思慕の熱は自分にとつて可成かなり異状なものであった。

教科書など授業を受けるときの外ほか覗いてみた試しがない位くらい自分の頭は漱石先生のこと一杯になつていた。

学友の総てはその頃流行の自然主義の小説にかぶれて漱石先生の小説を一種の遊びに過ぎないなどと高言していた。自分は興奮した。そして出来ることなら彼等と剣を握つて迄も漱石論をたたかわ闘たたかそうとも思った。

爾じらい来自らい自分は（以前からもそうであったが）何人にも文芸に就ては話すまじと誓ちかつた。而そして漱石先生の著書と云えば月謝を費つかい込みしてさえ出版される毎に買入れないものはなかった。貧乏書生にとって漱石先生の著書は決して安価なものとは云えなかった。それでいて厳しい叔父の監督の下にいた自分は前借でどんどん『鶉籠うずらかご』『漾虚集ようきよしゅう』『草合くさあわせ』『猫』などを本屋の棚から自分の貧しい本箱の上に移して悦んでいた。そして同窓には馬鹿な男と思われつつどうにか学校を出た。成績は八十名の内尻うちから一番であった。漱石先生には甚だすまない申

分ではあるがこの名誉あるケツから一番の成績は卒業試験準備中『鶉籠』に熱中していたことが三分通り原因をなしていた。あとの七分は当然自分が負うべき頭の低劣によることは云うまでもない。

その後自分は俳句をやる様になってからは漱石先生が俳句をお作りになっていることを先生の小説中で知^しっていた。自分は何となく心強さを感じずには居られなかった。

偶然自分は先生にお目にかかる機会を得た。時は丁度、先帝陛下崩御の年、大正元年十一月二十五日の事であった。城師から久々での句会を開きたいから是非胡^こ刀^{とう}氏と

二人連れで来て呉れるよう懇篤な案内の葉書を頂戴した。その頃の城師の住居は今の筏の舎の真正面に当る向河岸の二、三軒引込んだ処にある路次深の二階家であった。胡刀氏と私は共に好都合だったのでその日に御邪魔に上った。二階の城師の書斎兼句座に通されるとそこに既に柑子、霞溪、牛歩、真一郎の諸君が居られた。皆だまりこくって無我の境に打ち沈んで居たので吾々二人が突然円座の中に飛び込んで来たのを不思議そうな顔して一斉に白分達二人へ視線を集中された。自分はこの時の座に居た諸君と殆んど一面識を持ていなかっただため

ちよつと

しばら

一寸の挨拶をして座に着いたきり暫く沈黙の時を続けていた。暫くして柿色の法衣をつけていた牛歩和尚が席題は落し水と天長節の二題で句数は無制限ですと親切に仏のような声で教えてくれた。その時ふと城師の座に見えないのを気付いた。するとまた牛歩和尚は城師の来客と一緒に昼食をたべに出かけられたことを教えてくれた。

やや暫くして玄関の格子を荒々しくあける城師の帰宅をそれと知った。すぐ二階へとんとん上ってくる足音は来客ともに二人であることが分った。城師は吾々一同を

一渡り見廻しになって、

「イヤどうも大変お待たせしました」

「よくお出かけでしたね」

と特に胡刀氏と自分に慇懃いんぎんな挨拶をされた。そして円座の後をめぐって机の側にあつた大きなモスリンの座布団の上にとどかと座られた。後から一緒に来たお客様は縁側に立った儘まま暫らく運座の席をじろじろ見ながら別段中に這入はいろうともしないで居た。城師はお客様に向つて、

「先生お這入りなさいませんか」

とぶつきらぼうに云われた。お客様に先生と云う尊称を

城師が云われたので急に自分は好奇の耳をそばだてた。縁側に立って居たその先生の顔は非常にあごから下が多角形な感を私に与えた。そして角ばった肩の所有者であった。

「君、それじゃ少し邪魔をするかな」

と円座の真中に狼籍としていた硯筆、短冊の上を蛙のように飛越えて城師と私との間に座を占められた。

飛越えるときその先生は大きな声で「失敬」と云われた。

奇異な目でその先生を見て居た自分は隣の胡刀さんに

誰でしようとしてつと聞いて見た。胡刀さんは知らないとして静かに首を振った。而してまた隣りの人に（牛歩君だったと覚えて居る）誰ですときかれた、牛歩君は夏目さんであることを胡刀さんに教えてくれた、胡刀さんはその話を私に取次いでくれた。私はその話をきくと突然に怪しい心臓の響を感じた、日頃の漱石先生思慕の情は渦を巻いて貧弱な私の頭の中をかけ廻った、私の目は異様に輝いた先生の一言一句もききもらさじとじつと心を落ちつけた。

壁際にうずくまっていた先生はだまってぼんやりと

吾々凡人の顔を眺められた。その内城師と先生との間にこんな会話が替された。

「先生どうです一ツお作りになりませんか」

先生は手近にちらばっていた半紙へ何事か無駄書をさ
れながら何とも城師に答えられなかった、而して人そうを引
きつけるような懐しみを包んだ口辺からは微かな笑えみさえ
漏されていた。城師は再び、

「先生此処に居られる連中は皆な古い句ばかり作られ
るのです、どうです先生も古色蒼然としたところをお作
りになりませんか」

先生の微笑は破れて田螺たにしのようにぽつりぽきり答えられた。

「俳句は僕はもう暫く作つたことがない、昔正岡（子規先生）のいる時には面白いとも思つて盛さかんに作つたこともあつたがね……」

遠い松山時代に思を走せた先生はあまり俳句に興味のないらしい口振りであつた。そしてまた、

「俳句を作つていると人間は駄目になつてしまふよ、俳人は廢人に通ずるからね」

一流の先生の皮肉が出て来た。座にいる城師始め一同

この先生の口さがないお言葉には唯微笑を以てそれを迎えるより外はなかつた。城師は、

「まあ今日は先生も所謂廢人いわゆるになつてお作りになりませんか」

再応城師がお勧めしたけれども先生は無駄書の手を止めず微笑して居られる計りばかであつた。

暫く立たつて切の時間がきた。先生は何時いつの間にか無駄書の手をやめられ壁に寄添うた儘眠そうにまぶた瞼おろを下されていた。作句中の城師は短冊と筆を下に置かれ、

「少し横になつたらどうです」

と云われた。先生はじかに畳の上に横になられた。城師は手を烈しく叩いて下から老婢をよばれた。老婢は恭しく一枚の毛布を襖ふすまより引き出されて静かに先生の体へかけられた。間もなく先生は吾々の方を向きながらすかに睡眠の呼吸をもらされた。体は海老のように腰から下を丸く折られて甚だ無造作のものであった。

一度締切しようとした時間は城師の遅れて帰られたため延された。一題宛ずつ撰句する予定が二題一時に選句することつるべに改められた。釣瓶おとしの秋の日は遠慮なく庭後の松が枝へ落ちて行つた。淡々として仮睡の夢をむさぼ

つていられた先生は容易に目ざめる様子も見えなかつた。再び締切時間が来た。皆の手で箱の中に投げ入れられた短冊は浄書されはじめた。

秋の日はまたたく間に夜気を見せた。静かな眠りに落ちていた先生は皆の話声に目を覚された。毛布を搔きつけてやおら起きられた先生は直ちに威儀を正されてまぶしそうについたばかりの電灯を見上げられた。すると先生は懷中に手を入れられて何か探し物をされた。腹の底から引ずり出されるようにして先生の手に見えたものは物古びたお粗末の懷中時計であった。片側の凸凹した跡

が淋しく自分の目に映たうつつ（先日城師にこの時計の話をきいたら先生が中学校教師時代から持て居られたものであると教えて下すった）。先生はじつと時間を見られながら傍にあつたハンケチの小さい包みを取り上げた。包を開いて取りだされたものは秋の夜の灯にはあまり淋し過ぎる一個の薬瓶であつた。大病後の先生はこうして片時も薬を離さずにいるのであつた。先生は瓶を二、三度振られた。そして喇叭ラッパ飲み式に瓶の口を唇へ当てた。病後のせいか普通の人より特に突起して見えた先生の咽喉のど。私は薬を飲み下ろす毎ごとにぐりぐり活発な廻転運動をし

た。そして今度は運座の茶菓子に盛られた細かい塩せんべいの盆を膝元へ引寄せられそれをぽりぽりと旨うまそうに召し上られた。自分は大病後のお体であんな堅いものをたべられて差支えないものだろうかとはらはらしながら心配していた。先生は一向そんなことには無頓着にお盆の上へ顔を蓋するようにして盛んに塩せんべいを味わっていた。口を動かした先生は出しぬけに城師へ向われて

「君、僕はお湯へ行くから、一寸手拭ちよつとをかしてくれ給え」

と云われてついと立ち上りながら時計と同じく可成かなりに古

物な黒色の墓口がまぐちを出された。中味をあらためながら、

「湯銭はあるかな」

と独語された。

「こまかいのを上げましようか」

城師が心配すると、

「これでも湯銭位はあるよ」

とばかり古色蒼然たる募口を上下にちやらちやら二、三度ふられた。老婢から手拭と石鹼を受取った先生は直ぐ湯へ出かけられた。

短冊の清書は程なく終った。城師の発議で先生にも撰

をして戴くことにきめ湯からお帰りになるまでを一座の者は雑談に時を消ついやした。話題は主として先生の身上に關していた。城師は近来先生が持病の外に神経衰弱になやま悩まれておられることやまた訪問客の攻撃を避難するためよく城師の処へ飄ひようぜん然と来られることなど話された。

色々の先生に關する噂や質問が城師と一同との間にあつた。先生の健康に就て日頃先生と親しくして居られる城師はあまり樂觀的な話をなされなかつた。

約半時間後に先生は洗湯からお帰りになられた。濡れ手拭を欄間に掛けて先生はまた城師と私との間に座を占

められた。浴後の先生のお顔は晴々として額のあたりは電気の光に心持よく輝いていた。

「先生も撰句して下さい」

城師が云われると軽くうなずかれて

「やって見よう」

と機嫌よく承知をされた。

句稿は順々に銘々の膝から膝へと順序よく廻された。

隣に居られた先生はまだ撰句に不馴れな自分が遅々として句稿を廻さないのに気をいらしてか、

「まだすみませんか」

と丁寧な言葉で催促された。少しく逆上気味であった自分
分は好い加減にして句稿を先生に御手渡しした。先生は
一句一句に目を通されていた。晦渋な句に出会^でわすと筆
を握った儘^{まま}手を頤^{あご}の処へ持て行てじつと考えて居られ
た。一枚の句稿を見終ると先生は隅の余白へ丸の中に漱
の字を書かれてから城師にそれを廻された。数枚の句稿
が万遍なく一巡してから撰句は真中のお盆の上に出され
た。撰句は例の通り城師がお読みになった。一番最後に
城師は漱石先生選と声高に読み上げた。

どんな句を先生はお撰みになるのかと当初から期待し

ていた自分は耳を澄して城師の口元を見ていた。透き通るような城師の声は続け様に私の耳を打った。それは意外にも五句程私の句を先生が取ったからである。予期しないこの出来事は再び軽い心臓の鼓動を自分に与えた。

撰後の句評に城師と先生との間に大分議論があった。

淋しきがうれしき菊の三日かな

城師が第一番に月並だと先生の撰ばれた私のこの句を鎗玉に上げられた。胡刀氏も賛成された。先生は、

「淋しいものはうれしいものだ」

と答えられて又、

「よく味って見ると、淋しいものはどこかうれしいところがあるように自分は思う、深い意味は別問題としてそう云う心持を自分は面白く見たからこの句を取た^{とっ}。別に諸君の云われるような月並臭があるとも思わない」といわれた。私は先生が作者に対し意見を徴しはしまいかとはらはらして居たが、より以上問題が進まなかったためこの句の評はそれで納ってしまった。次は又先生の撰に這入った私の句であった。

水落すところどころや利根の月

この句を平凡ですなと城師は云われた。撰者として自

分の撰んだ句には当然責任を負うと云うような態度で先生は答えられた。

「勿論あまり上手な句ではないが利根と云うので広々とした感じを自分に思い起させたから取ったのだ」

尚^{なお}二、三城師との間に押問答があつたけれど結局先生は選に入れてもよい句だと城師の平凡説に敗けて居られなかつた。

自分の句が計らず先生の弁護に依て一縷^{いちる}の望をつなぎ得た事は漱石宗の自分にどの位の喜悦と満足を与えてくれたかとても想像以上のものであつた。

今度は先生が、

落水おとしみずどんぢりにある水車かな

霞溪

この句を見つけ出して批難された。

「どんぢりは汚ない言葉である。芝居などで五人男とかなんとか云う連中が順番に舞台の真中で文句を並べる時、一番尻の奴がさてどんぢりに控えしはとか云うが自分はある言葉はどうも好まない、その意味でこのどんぢりにある水車をいやな句だと思ふ」

城師は黙してはいない。

「自分は下品な句だとは思わぬ、言葉の汚い奇麗は少

しも句の上品下品に関係しない、落し水が流れて行く川下の水車をどんじりにあると云った処に滑稽もあり俳諧味もあると思う」

此処でまた言葉の上品下品と云う関係があつたように記憶しているが思い出せない。

先に注文した夕食が銘々の前に運ばれた。城師は釜あげ位ぐらいは召しあがつてもいいでしょうと先生に勧めて居られたが昼食の遅かつた先生はたべたくないと言われた。霞溪君と牛歩和尚はチュウチュウ熱そうに釜上げをやられ、胡刀氏と自分は先生の鼻先で餓鬼のように親子

井を平らげた。皆んなの食事中先生は体を横に腕枕をさ
れて鴨居かもいの水彩画を見つめられていた。食後の茶を啜つ
ていた城師に、

「この絵は商売人くろうとの描いたものじゃないのだろうね」
と尋ねられた。

「そうですこれは工科の学生が描いたものですが素人
としては上手な方じゃないでしょうか。なんでも浅井先
生の門下になってしばらく画をならった事のある男で
す、句も一樹いちじゆと云って相当に作ります。何時いつぞやこの男
は先生の処へ私と一緒に伺ったことがある筈です」

先生は記憶にないと云った様な様子をせられてまだ画面から目を離さないで居られた。そして、

「工科の一学生が描いたものとしてはまずくとも仕方がないが師匠に就て習ったことがあるとすれば今少し何とかなっていそうなものだ」

才氣溢るる一樹君の名画も先生にかかつてはあまり好意を持たれずにしまった。「中略」

尚^{なお}一樹君の絵に同情を持って居られた城師は、

「先生横になつて画を見ちやだめですよ。ちやんと座^{すわ}て御覧になれば上手に見えます」

「横から見たって何処どこから見たって下手なものだよ」

と先生は笑いながら答えられた。この時私は先生と城師との関係が師弟を離れて父子の如く親密に自由に有り得たことを羨ますには居られなかつた。

食後の話題は主として先生から出た。先生と柿色の法衣を着た牛歩和尚との間に天機洩すべからずとも云うべき珍談があつた。それは先生の住んで居られた早稲田と牛歩和尚のお寺のある隅田村との優劣論であつた。話の筋道は只ただ頗る面白いことであつたことだけは覚えている

が頭の鈍い私は今総てを忘れてしまった。

又寄席の好きな先生は先生の大学時代と今日との寄席の変遷を先生一流のユーモアに富んだお言葉で話された。この話は多分『硝子戸の中』にお書きになったように覚えている。

城師のお職しよくしように掌柄ながら話は何時か先帝御大葬のことに移っていった。城師は好い記念物があるからと云て押入の中から大葬使たりし城師御自身着用の冠、帯刀、沓くつを先生の前に取り出された。先生はいちいち数奇な目を放て時代を離れたこの由緒ある記念品を眺められた。弓のよう

にそり反かえつた帯刀は先生はやつと声をかけて抜かれた。そして皆の前に玩具のような中身をピカピカさせながら振って見た。

「こりや家の小供達が喜びそうな物だ」

と云いつつまたその鞘へ身を納められた。先生は面白半分装束しようぞくを着けて見ようと神主のかぶるような冠もつとを尤もらしく頭に乗せられた。帯刀は無器用に兵子帯へこおびの間へさされて反そりを上に向けるのか下へむけるものか城師に尋ねられた。無雑作に出来上った漆塗の沓しほを暫くはかれた先生はつと立上って、どうだと真面目な顔をされた。

皆は一斉に吹出してしまった。然しあの温情に満ちたどこともなく威のある先生のお顔は単に一時の滑稽とのみ自分には思われなかった。

秋の夜は更けた。先生はもう遅いからと云って傍にあつたセルの袴をみずか自らおつけになつた。細長い城庵の路次に闇を潜つて先生がお帰りになられたのはそれから間もなかった。

先生と私との関係は只の一回の同座のみでかくの如くはかなく且つたよりないものであつた。然し先生より間接直接に受けた崇高偉大なる人格の放射はこの哀れな私

の一生を通して片時たりとも忘れることの出来ないもの
になつてしまつてゐる。

一句を奉る。

とぼくと先生枯野を行くや否や

(大正六年一月九日)

(『澁柿』大正六年二月)

日本文学電子図書館

漱石先生と運座(抄)

著者：しゅのうだんちょうか守能断腸花

制作者：宮澤一郎

底本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館